多岐川恭 仁木悦子 佐野洋集

日本推理小説大系14 東都書房

日本推理小説大系第14巻

多岐川恭 仁木悦子 佐野洋集
定価三八〇円
著者　多岐川恭 仁木悦子 佐野洋
発行者　黒川義道
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
発行所　東都書房
東京都文京区音羽町三丁目一九
電話　東京(九四一)三一一一
振替　東京　七二七三二
落丁乱丁本はおとりかえします
昭和三五年五月二〇日第一刷

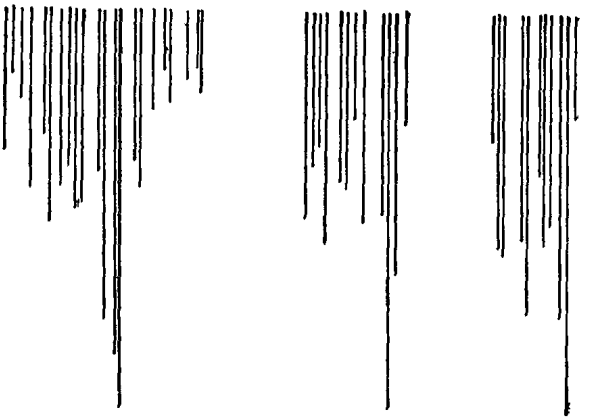
目次

多岐川恭
氷柱 5
落ちる 91

仁木悦子
猫は知っていた 105
粘土の犬 196

佐野洋
一本の鉛 209
不運な旅館 293
解説　江戸川乱歩 308

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



多岐川恭

氷柱

はしがき

雁立市――もちろんそれは架空の都会である。人口は十万から十五万、日本の端から端まで、位置や気候こそことなれ、これらの多くの地方都市は不思議なほどに似よった外観をもっている。それはほこりっぽく、散文的で、美的要素を欠いている――本篇の舞台となる雁立市も、そういう小都市の一つである。

外観が似ているように、中に住む人々の生き方や考え方も、似たりよったりのものであろう。それはいずれ劣らず、好色であり、詐謀にみち、貪欲であり、卑劣であり、また時には愛にあふれ、純真であり、勇敢であるだろう。ありきたりの町、ありきたりの人々の織りなす人生の模様は筆にするに退屈である。

しかし、この町に一人の変った男が住んでいた。いや、変った男と言ってはあたらないかもしれない。むしろ彼は、片隅にひっそりとして、誰の眼をも引かない平凡きわまる男だと言ったほうが事実に近いであろう。――ただしこの男は、ふとしたことからある独創的――と彼の考える――行為を思いつき、それを実行することに成功した。それはある犯罪の形をとった。作者は、その男の手記の形式でこの物語を進めてゆくことにしよう。事実は、彼は手記などを書く男ではなかった。

灰色の序曲

1

この風景の主調は灰色だ。歩きながら、ふとそれに気がついた。さびれた一本道を私は歩いているのだが、十米くらいの幅の、アスファルト鋪装の所々はげたその道はまっすぐに坂を登り、一筋の灰色をきわだたせている。地平のあたりに町工場の屋根が見え、それは黒い。その背後から私の真上まで、灰色の雲におおわれた空だ。落日の頃ならば、いくらか紅味がついていたろうが、今はたそがれで、雲の色の濃淡もはっきりしなくなっている。

道の左右にはポツリポツリと家があり、どの家も面白いほど色というものがない。漂白でもされたように、屋根といわず壁といわず、窓や戸口のガラスさえ灰一色である。この道は谷になっていて、私の歩いている右側は家並のうしろがコンクリートの崖。その上を鉄道が通る。左側は石垣で、その上はまた道路になっているが、ここからは何も見えない。あるものは灰を流した空だけである。

間遠くならんだ街燈の灯がやや濃さを増す。また家々の燈火の黄色い明るさも深さを加えてくるが、これらは灰色の風景のアクセントになっているにすぎない。

私は毎日たそがれ時に、目的もなく歩く習慣なのだが、この道はあまり歩いたことがない。それにしても、この灰一色の風景は私にしっくり合っているように思われる。人もほとんど通っていず、たまにすれ違う者もみな灰色の中にはめこまれて、私になんの刺戟も与えないので、落ちついた気分を乱されることがない。

私は一本道をそうやって歩きながら、とりとめもない考えを追い、また現実に返って家々の燈火を眺めるのが――しいて言えば楽しい。ずっと昔にチェーホフの「燈火」という短篇小説を読んだことがあり、筋は忘れたが、燈火というものについての印象が私と一致しているので、深い感銘を受けたことがある。人生のあらゆるものが燈火に象徴されている――その楽しさ、苦しさ、悲しさ、そしてはかなさ――私は昔から遠く近くの家の燈火を見ると常に新しく、強

くそれを感じる。

それはおそらく感傷といってよいものであろう。そして感傷は自己が傍観者であることから生まれるのであろう。私は常に傍観者であったし、今後も傍観者であることを変えようとは思わない。

地平のあたりに見えた町工場が近づいて、トタン板かなにかで、つぎはぎだらけの建物のあらゆる隙間から光が洩れているのが見わけられる。もうあたりは暗くなり、人通りも絶えた。私が歩いている間、三四台の自動車が私を追い越して行っただけである。私は同じ道を引き返した。

2

その子供は道の片隅にコロリと仰向けになっていた。七八歳ほどの女の子である。スカートのまくれた細い両足を人形のように開いて伸ばし、下駄は両方ともどこかへ飛んで見えなかった。びっくりしたままの、大きく見開いた両眼が、かすかに街燈の光を映している。私はキュッと肩の上でちぢめた腕にさわり、手首を握ってみた。次に洋服の背中のホックをはずし、胸を開いて手をあててみたが、脈はなかった。夜目にははっきりしないが、服装は貧しいようだった。

私はしばらく女の子の乱れた頭髪を撫でながらしゃがんでいた。どこかに傷があるのか、出血があるのか、それは暗くてさぐりあてることができなかった。だが闇をすかしてみて、下駄のありかはわかったので、両方ともまた女の子にはかせ、服装をととのえてやってから立ち上がった。

倒れていた位置は家と家との中間で、そこから上の道路へ通じる小道があるらしかった。女の子は小道を走りくだって、この道に出た時に自動車にはねられたのであろう。

私はその場を立ち去りながら、せめて外傷が見えず、お人形のようなままで死んでいるのが幸いだったと思った。それは女の子らしく、生と死の間を縄飛びと同じような軽さで、ピョンと飛び越えているような感じだった。この死は、彼女にとって惨酷なものではなかった。

無心のうちに、無心のままで死ぬこと、それは私にはむしろ幸運と思える。彼女がもし生き永らえていたとしたら、どのように成長し、どのような道を歩んだであろう。そして心はどのように複雑になり、どのようにゆがんで行ったであろう。——私は漠然と頭を横に一つ振り、帰路を急いだ。一度振り返ってみたが、もう女の子の姿は闇にとけこんで、消えていた。

今日の散歩は往復で三キロほども歩いたろうか。体が温まって、頬を撫でる早春の風が快よかった。私はまた、今日のような淋しい道でなく、ネオンに彩られたにぎやかな街筋を歩いて、さまざまな通行人が身にまとっている生活の陰を眺め、立ちならんだ商店の内部に眼をとめて、それらの小さな営みが生み出す哀歓を想像するのを楽しみにしている。私は、自分の住むこの都市のほとんどあらゆる街路を毎日あてもなく散策するのだが、どの街路も、与えられる印象は微妙にことなっているのが私を興がらせる。この町——雁立市と、そこに住む住民はちょうど舞台の背景と登場人物のように見え、私は孤独な観客ででもあるようだ。私は目の前に展開する筋のないドラマを、ただ眺めるだけで満足している。私自身がその中で、なんらかの役割を演じようという興味はまったくないのだ。

今夜は私の気分は冷たく澄んでいる。その底に、あの女の子の死が沁み入るような味を添えている。私は常に死の近くにいるので、「死」という事実は、私に衝撃や恐怖感を与えない。

3

一本道をそれて、何度か悪い道路を折れ曲ると、立木の多い住宅地になる。それもずっとはずれのほうに、高い杉の木ばかりを防風林のように植えめぐらした一郭があり、入口の鉄門に「小城江」という小さい名札がかかっている。それが私——小城江保のすみかだ。もし私の家を訪れる物ずきな人があるなら、彼は鉄門を入ってから、さらに小道がうねうねと木々の間を縫って走り、いつ玄関に到着するかわからぬような気がして驚くに違いない。それは私の好みから出たことなのだ。私の宅地は広く、一種の森とも言える。その森の真中に、私はごく小

さな家を建てているのだ。

玄関のドアを鍵であけ、いつものように戸じまりをすませてから、すぐに書斎に入った。窓ぎわの椅子に身を深く埋めて、窓の外を見上げると、樹々の梢のシルエットの上に星がまたたいていた。雲が切れはじめたのであろう。灯りをつけず、そのままじっとしていると、婆やの政が熱いレモンの絞り汁を盆にのせて入ってきた。いつもの習慣である。

「電気もつけずに、何をしていらっしゃいますか」

政はそうつぶやくように言いながらスタンドの灯をつけ、黙ったまま煖炉にまきを入れにかかった。永らく私と一緒にいる政は私の気持をよく呑みこんでいて、必要以外の口をきくことはない。

「女の子が死んでいてね」

私はポツンと言った。政はゆっくり振り返ると、さぐるように私を見た。

「本当でございますか。どこで？」

「なんという通りかな。汽車道の横の坂道だ。行く時はそういうものはなかったが、帰りに、道ばたに転がっていたんだ。自動車か何かにはね飛ばされたんだね」

「死んでおりましたか。けがをして気を失っていたのじゃ……」

政は、せきこんだ真剣な口調で言いながら、どこか非難めいた、強く押してくる表情だった。

「脈を見たが、死んでいた。傷がなくて、人形のようにきれいだったよ」

政は深くうなずいて溜息をついた。

「かわいそうに、どこの子でしょう。そのはね飛ばした自動車は逃げたんでしょうか」

「逃げたんだ。私が歩いている時に自動車が三台か四台通ったんだが、そのうち、どれかがやったことだろう」

「なんというひどいやつでしょうね。旦那様は、すぐ警察へお知らせなすったでございましょうね」

「知らせていない」

「じゃ、すぐお電話なさいまし。警察へは早く知らせないといけませんですよ。そんな運転手はすぐ捕まえなけりゃ、死んだ子供がかわいそうじゃございませんか。そんならあたくしが……」

そう言うが早いか、政は卓上の受話器を取り上げていた。旦那様は、冷淡な……という非難が彼女の肩先から読みとれた。私は静かに政から受話器を取り上げた。

警察はすぐ出た。若い男の声だった。私は女の子の死んでいる状態と場所を告げると、先方がいらだたしく呼びつづけるのを無視して電話を切った。住所氏名を告げてかかり合いになるのを避けたのである。

昨夜と同じように私はしばらくミルの自伝を読みついだ。何げないふうな行文のなかに、天才的な頭脳の明晰さがよく出ているのがひどく面白かったが、これほどの聡明な男が、女性崇拝の固定観念を脱していないのが不思議であった。――そのあと、まだ眠気がやってこないので、久しぶりにバッハのピアノ曲のレコードを聴いた。その非情で明澄な音色の中に、私はあの女の子の静かな死体が浮び上がってくるのを感じた。

床に入っても、女の子は私の瞼から消えないのだった。そして、私を追い越して行った自動車の細部が次々に私の記憶に返ってきた。やがて私は、記憶のゲームに夢中になっていた。極度に頭を集中すると、記憶に欠けている小さな事柄が次第にあるべき場所にはめこまれてゆく。私は眠ることをあきらめ、寝間着のまま机に坐ると、雁立市の電話帳を繰りはじめた。時計が二時を報ずるのをうつつに聞きながら、それでも私は電話帳のページを繰り、自動車の所有者と思われる家の番号に赤鉛筆で印をつけるのをやめなかった。なぜそう夢中になっているのか自分でもわからず、私は何度も苦笑した。少くともそれは、政のような、憐れみと正義感から出たものでないことは確かだった。

4

翌朝、ゆで卵とトースト二切れに紅茶の簡単な食事をすますと、おだやかな光のみちた縁側の長椅子で新聞をひろげた。女の子の身許はどうなのか、また逃げた自動車と犯人は発見されたかということに、やはり私は興味をひかれて

いたのである。

その記事は社会面の片隅に小さく一段で出ていた。女の子は花房ルリ子と言い、小学校の一年生で、花房登喜子という女の娘である。家は五間道路というから、昨夜私が散歩した一本道にそった家のどれかなのだ。職業は記事の中に出ていず、想像するほかはないが、いずれ母子二人きりの豊かでない暮しであろうと思える。

かんじんの犯人はまだ逮捕されていない。おそらく市内の営業用、自家用の車で、昨夜のあの時刻に外へ出ていたもの、そして五間道路を通ったものを調査しているのだろうが、私には発見は疑問のように思われる。記事を見ても、自動車はタイヤの跡をまったく残さず、目撃者も名乗り出ていない。小さい女の子をはね飛ばしただけでは、車体になんらかの傷がついているとも考えにくく、おまけに、女の子は私の見たところでは出血していなかった。

警察にとって、こんな事故は決して珍らしくないだろう。新聞を読む者も、こんな記事はほとんど無関心に読み飛ばしてしまうに違いなく、これまでに多くの犯人が捜査の眼をうまくのがれて、しばらくすると犯人自身も警察も事故そのものの記憶を失うのであろう。

私もまた冷淡な読者の一人だったかもしれないが、この場合は最初の死体発見者が私であったし、女の子の現実の肉体に触れたという体験は、私の気持を微妙に変えていた。

私は外出の支度をして玄関へ出た。政がびっくりした顔で私のうしろへついて来た。

「おでかけでございますか？」

私は夕食後の散歩以外にはめったに外出することはないので、政は、今時分いったいどこへ行くのかと不審に思ったのである。

「警察へ行ってくるのさ」

「警察へ？　旦那様が？」

「昨日女の子をはねた自動車がまだ捕まっていない。私はちょっと心あたりがあるから助言しに行こうと思うんだ。役に立てば捜査の無駄がはぶけるわけだから」

政は感激した様子で、しきりに旦那様を見直したという意味のことをしゃべっていた。

雁立市の警察署まではかなりの道のりだったが、ゆっくり歩いて行った。その間、私は日頃に似ないこういう積極的――私にしてみれば、積極的な行動を私にとらしめているものはなんだろうと考えていた。それは、かなり強い力で私を動かしているものである。説明できそうでできないうちに、官庁や銀行のならんだ大通りに出た。雁立市署は役所の建物の中でも最も老朽した、ねずみ色の三階建で、石段を上がり、ドアを押して中へ入るのは初めてだった。受付の巡査に名前と用件を告げると、巡査は少し興奮した表情になって、すぐに私を捜査課長のところへ連れて行った。

5

「昨夜すぐにでも連絡なり、おいでになるなりしていただきたかったですなあ。じゃあ電話されたのはあなただったのですね。係の者が、あなたの住所氏名を尋ねる前に電話を切ってしまったというのですが……」

名刺を見ると、捜査課長由木浩志とある。三十半ばであろう、長身で面長の、皮膚の浅黒い男で、広い額から眉宇にかけての相好は、強い意志力と聡明さを漂わせているのが私を話しやすくさせた。

「死体があるという事実だけをお話しすればよいと思ったのです。死体は私が見たままを発見なさったはずだから、捜査は専門のあなたの領分で、私などは何も御参考になることを知っているわけではないので、私の名前などをお知らせする必要もあるまいと考えたわけでした」

「いや、どんな些細なことでも、案外私たちの参考になることがあるのです。ことに最初死体を発見されたのはあなたですから。かかり合いたくないというお気持はわかりますが……」

「今朝の新聞をみて、まだ自動車が発見されていない様子なので、これはかなり捜査が困難かもしれないと思われるので、とにかくやってきたわけなのです」

由木警部は笑顔になってちょっと会釈した。

「いやどうも。昨夜からずっと市内の自動車を片っぱしからあたったし、近接の市町村にも手配しているのですが、これといったはっきりしたのが摑めていません。というのは、そいつは何も証拠になるものを残していないのです。タ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

イヤの跡でもはっきりしていれば手掛りはつくのですが、アスファルト道路で駄目だし、時刻も今のところ漠然としたもので、アリバイ捜査もやりにくいわけです」

「その点は私が助言できますね。私は昨夜あの道を散歩に出かけたのです。家を出たのはうす暗い……五時半頃でしたろうか。近所の道をぶらぶらしてから例の五間道路に出、まっすぐに坂の上の町工場のあたりまで行ってから引き返しました。で、行きには死体はなかったのです。私が帰宅したのは六時半過ぎで、従って死体を発見したのは六時十分前後ということになりましょう。行きに死体の場所を通ったのは、まず五時五十分頃と思いますから、事故が起ったのは五時五十分から六時十分の間と考えて間違いないと思います。私は時間についてはかなり正確なほうなので……」

由木警部は心中で明かに私を非難しているに違いなかった。彼の唇はいくらか引きしまってきた。

「それをきのう知らせて貰えばねえ。しかしまあ、それだけでも大いに助かりますよ。それで、あなたが散歩している途中、あの道を自動車が通ったはずですが……」

「実は、伺ったのはそのことなのです。自動車が三四台私を追い越して行ったのは覚えているのですが、それ以上はっきりした印象は私に残っていない。……残っていないと思いこんでいたのが、夜おそくなって、考えるともなくそのことを考えているうちに、色々と思い出してきた。そして、今ではかなり正確に、追い越した自動車についてお話できるつもりです」

由木警部は緊張した表情になり、眼は強い光を帯びてきた。いつの間にか二三人の刑事がテーブルのまわりで身を乗り出している。

「最初に私を追い越したのは灰色の小型の車でした。自動車のことはくわしくは知りませんが、あの型は国産のようでした。スピードは二十キロ前後と思います」

「乗っていたのは？」

由木警部は手帖にメモしながら訊いた。

「運転手だけです。自動車番号の札は黄色でした」

「どっちの方向に行ったのですか？」

「まっすぐ、坂の上で見えなくなりました。他の二台も同じです。その次はトラックでした。黄色に車体を塗ってあって、積荷はないようでした。運転台に運転手と助手が二人乗っていて、何か話し合いながら追い越して行きましたが、スピードは前の車とほぼ同じ……いくらか早かったかもしれません。ドアのあたりに『自家用』という字が書いてありました」

「前の車との間隔は？」

「時間で言って三分くらいでしょうか。小型が坂の上で消えて、しばらくして私を追い越しました。最後がやはり乗用車で、これは黒い色の大型です。乗っていたのは運転手が一人で、この運転をしていたのはかなり若い男のようでした。番号札は白で、かなりの高級車といった体裁でした」

「スピードは？」

「三十キロから四十キロでしょう。トラックが見えなくなってから、これも三分か四分たった頃私を追い越して行きました」

由木警部はしばらく考えていた。私は自分の話をこれで終ったわけだった。昨夜考えたことで、私なりの解釈は持っていたが、述べるべき事実は以上に尽きている。

「あなたの方に向ってきた車はなかったのですか？」

「私があの道を歩いていた限りではありません。女の子をはねたのは、その三台のうちの一つであることは確かでしょう」

「ありがとうございました。これでメドがつきましたよ。あなたのように明確に覚えていられる証人も珍らしい。運転手の態度などで、変った点はありませんでしたか。あわてた様子だったとか……」

「それは覚えておりません。というより、みな正面を向いて、ごく普通に見えましたからね。ただトラックでは話し合っていましたが、女の子をはねて、その善後策を講じているといった感じは受けませんでした。そのうちの一人は、たしか白い歯を出していたように記憶しています」

由木警部はうなずきながら、突然こう言った。

「あなたは観察力のよく発達した方ですな。僕

などよりずいぶん頭もよさそうな方だ。……年上のあなたに失礼な言い方かもしれませんが、どうもそう思える。三台のうち、どれが子供をはねたか、あなたにお考えがあるのでしたら話していただきたいですね」

私は由木警部に好意を持ったが、私の考えを話す気にはもちろんならなかった。

「いや、門外漢の私の意見など、それこそ物笑いでしょう。それより、女の子の死因はなんですか。私の見たところでは外傷はなかったようですが……」

「頭を強く打たれて骨折しています。ショック死を起したのですね」

「何をしにあの道に出たのですか。何か買物の使いに行ったにしては何も手に持っていなかったでしょう。崖上の道で遊んでいたのでしょうか」

「母親は遊んでいたはずだと言っています。夕食後すぐ遊びに出たか、母親が出したか、とにかく母親の登喜子は使いには出していません。まあはっきり言えば、登喜子は客をとっていたのですよ」

私は、花房という母子二人の家族の暮しをそれで想像することができた。私はそれ以上聞くことをやめ、立ち上がった。由木警部は礼を述べてから、しばらく私の名刺を見ていた。

「小城江保さん……上青田町というと、あの住宅地だな。あのあたりの家は、妙な、森のように木の多い所がありますね。ひょっとすると、あの家が……」

「そうです」

「どうも、あなたは変っておられますなあ。人間嫌いですか」

私は苦笑した。

「そう言ってもよろしいでしょうね。ただ、私は人間嫌いというほど自分を高く買っていないだけです。人間の関係がわずらわしいのですよ。わずらわしいというのは、多分私自身のつまらなさからくるのでしょう。私の望みは、静かにしていたいということです」

「しかし御商売は何かやっていられるのでしょう？」

「私は遊民です。何もしないのですよ。私のような無力な男に何ができるでしょう」

6

警察に出頭して証言したのは、私にとって生まれて初めての経験だった。捜査課長といった人間に会ったのも初めてだったが、この由木警部は私にいい印象を与えた。私の証言は捜査にかなり重要な手掛りを与えたはずであり、それが由木警部の役に立つのは悪い気がしなかった。しかしこれ以上事件に関係する気はなく、得体の知れない私の愚かな興味も打ち切るべきだった。

警察から帰ったあとしばらくを私は庭の見廻りにすごした。空は薄曇っており、立木や芝は冬枯れのままちぢかんだ姿をしていた。

庭といっても、方式に従って造園したわけではない。そういう人工の匂いは私にとって我慢のならないもので、買い取った広い原野を、ほとんどそのままに手を加えずにいる。椎や樟などの野生の喬木があちこちにそびえ立ち、杉木立の斜面は昼も暗いほどに梢が陽をさえぎり、地面は褐色の朽葉でおおわれている。源を市の南方の丘陵から発する小川が、工合よく私の庭を横切って流れていたので、私はある部分をせきとめて池を造った。私はこの広い庭を常に歩いて飽きることがなかった。それは季節によって驚くほどあざやかな変化を見せ、私は思いもかけぬ所に桜の古木を発見したり、豊かにみのったざくろに突きあたったりするのだった。小川の岸のやわらかい草の上に横たわると、流れのかすかなつぶやきにまじって様々の小鳥の声がひびいた。時に私はつたにおおわれた四阿に腰を下ろし、持参のフルートを吹いた。地上の何人にも劣らない豊かさを私はこの庭において持っていた。私は社会とのあらゆるつながりをここで遮断することに成功したのである。

私は水の少くなった川にそって歩いた。川の面は鈍く冷たい光をもち、岸辺の小石を洗っていた。なんの木か知らぬ丈の高い落葉樹の網目のような梢から、数羽のひよどりが一斉に飛び立った。向うの杉木立は敵意を持ったようにくろずみ、沈んでいた。そういう風景が私を誘ったのであろう、五間道路に転がった女の子の死体がはっきりと私の瞼によみがえって来た。私

はしいてその幻を追い払おうとはしなかった。それは沈痛な冬の風景と合っていた。永遠に静止したものの美しさが、そこにはあるようだった。――政が私を捜しあてたのはそういう時であった。由木警部から電話があり、会ってもらいたい人がいるから、すぐに出向いてくれないかというのだった。

調べ室というのであろう。汚れてガランとした中に古ぼけた事務机や、抽斗のない長いテーブルが無造作にならべられた部屋に私は通された。由木警部が私を迎えた。テーブルには一人の若い男が掛けていた。

「例の三台の自動車はすぐわかりましたよ。一番最初の小型はミツバタクシーの車で、運転手はちょうどあの時刻に客をおろしたあとの空車を運転し、五間道路を通って帰ったことを認めましたが、事故は知らないと言っているし、死体も見かけなかったと言っています。次のトラックはやはりミツバと同じ方角にある運送屋で、引越し荷物を運搬した帰りだったそうですが、これも知らぬ存ぜぬです」

由木警部は坐っている男を顎でしゃくった。

「この男は最後の黒い大型……なんだったかな、ああクライスラーか、クライスラーの運転手なんですが、昨日の夕方五間道路を通ったこともないし、女の子などもちろん知らぬと言うのです。その時刻には車はちゃんとガレージに入っていたんだと言うんですね。この車は、例の南川の自家用車です」

「例の、と言いますと？」

「驚いたね。あなたは永らくこの土地に住んでいて、南川を知らないんですか。南川正六といって、技師から叩き上げて土建業の大物になった人物の二代目が、今の南川正一郎です。かなりぼんくらな男らしいんですが、とにかく親の財産を引き継いで、大きな屋敷に住んでいますよ。それでお訊きしたいのは、あなたはこの運転手に見覚えがあるかどうかです。黒いクライスラーを運転していたのはこの男でしたか？」

まだ三十にはなるまいと思われる、細面の血色の悪い男である。そげた頬にある種のけわしさがあり、眼付はするどかった。

「どうもこの人ではなかったように思います。確かなことは言えませんが……」

私はそう言った。

「この男ではなかった……すると、ちょっと面倒になってくるな。あなたの観察眼で違うと言われれば、事実違うのでしょう。この男にはアリバイもあるのでね」

無表情で黙りこくっていた男は、その時初めてかすかな冷笑をうかべた。

この男――南川氏の抱え運転手で古田という名である――は昨夜の五時半から六時半にかけて、他の使用人たちと一緒に夕食を食っていた。同席した使用人がそう証言しているのである。

「口裏を合わせたのかと思っていたんですが、そうでもないらしいですな」

「ほかに黒色の大型自家用車を持った者は……」

「二三あります。ところがどうもねえ……」

そう言いながら、由木警部は少し前に調べ室に入ってきた刑事に眼くばせした。刑事は古田をうながして室外に連れ去った。

「まずアリバイは確実なんです。私はやはり南川の車としか思えないんですが、古田でなかったとすると、南川自身が運転していたとも考えられるでしょう」

「南川氏にお会いになったのですか？」

「不在で会えませんでした。今夜にでもまた出かけるつもりですが、何しろ広い家なので、家庭や使用人に訊いてもアリバイははっきりしないのです。大体南川というのは気の弱そうな、おどおどした感じの男ですな。とても、あの剛腹な南川正六の息子とは思えないくらいです。家でも自分の書斎に引きこもりがちだそうで、彼の顔を一日じゅう見ないという者もあって、何をしているのやらわからないというわけです」

「ガレージは目につきやすい所にあるのではありませんか」

「いや、玄関横ですが、引っこんでいて、植込みやら何やらで人目につきにくい所です。おまけに屋敷の付近はほとんど邸宅の塀つづきで、車が出たかどうかの目撃者も出ない始末です。弱りましたよ」

7

南川邸はなるほど大きな屋敷であった。複雑な意匠の鉄門が広く開かれ、そこから玉砂利を敷きつめた環状路がカーブをえがいて、爪先上がりに玄関に向っていた。私はその道をすたすた上がって行ったが、砂利を踏む音がしなかった。玉砂利は下のコンクリートが見えないように巧妙に塗り固めてあったのである。ひそかに車を出す場合、音がしないはずであった。

警察からだと告げると、すぐ応接間に案内された。部屋の模様は一見平凡な感じで、地味で目立たぬ飾りつけだったが、気をつけると、かなり凝った気を配ったものであることがわかった。テーブルや坐り心地のいい椅子は古代ギリシャ風な簡素で優美な体裁で、固い木質特有のなめらかな光沢をもっていた。部屋の三方にある窓には薄い紗のような肉色のカーテンと、明るい茶色の厚地のものとが二重にかかり、やわらかい雰囲気をつくっている。床は、ふかふかとした非常に広いじゅうたんでおおわれ、灰がかった青い色であった。全体がすっきりした、暖かい調子をもっており、掛けられている二三の絵も、調子をこわさない適当な趣味のものであった。南川氏を待ちながら私は一つ一つの絵を見たが、一つはモジリアニ、一つはユトリロ、他の一つは三宅克己の水彩画であった。私には絵の鑑別はできないが、南川氏の持物が贋物であるはずはない。ただ一つ、調子をはずれたものがある。それが、入ってきた南川正一郎であった。

由木警部の言った通り、南川氏は弱い性格らしく、たえずやり場に困ったような眼の動かし方をし、落ちつきがなかった。恰好のよい卵形の顔をし、目鼻立ちは造作の小さいままに美しくととのい、ちょうど人形のような感じだった。一種の空疎な印象はそこから来るのかもしれなかった。

「私は、実は警官ではありません。お会いする口実に警官だと言ったのです」

南川氏は、最初私の言葉を理解しないような漠然とした表情をしていたが、意味がわかると、何かを避ける恰好で上体をグッと上に反らせた。

「昨夜、五間道路で小さい女の子が自動車にはね飛ばされて死にました。私は現場は見ませんでしたが、ちょうどその頃、五間道路を通っていました」

「それは……しかし私にはよくわかりませんが、どういう御用でいらっしったのでしょう。失礼ですが、御名刺もまだ戴いておりませんので……」

南川氏は懸命に自制しているようであった。いかにも不思議そうな微笑を裏切って、唇の端が目にたたぬ程度に痙攣した。

「物ずきと思われてもやむを得ませんが、自首をおすすめに参ったのです」

「あなたは誰です。何をおっしゃるんだ。僕が何をしたというのです。失敬ですよ、そんな……場合によってはゆるしませんぞ」

南川氏は真赤になって立ち上がっていた。小さい美しい唇から怒声が豆でもはじくように転がり出てしまうのを私は平静に待っていた。

「あなたは昨夜、多分六時頃、五間道路で女の子をはね飛ばし、そのまま帰られました」

「冗談じゃない、なんの寝言ですか。私はその時刻には自分の部屋にいたんです。第一、私は自分で車は運転しませんよ。警察でいうアリバイ……アリバイを出せと言われれば、いくらでも出せます」

南川氏は突然、威丈高に怒っているポーズを捨てて、低い、子供をあやすような声になった。

「あなたは何か誤解していらっしゃるのですよ。私はかわいい女の子を轢き逃げするような冷血漢じゃありません。私がやったのなら、すぐおりて女の子を病院へ連れて行き、それから警察に出頭したでしょう。私も多少は知られた人間ですから、そんな卑劣なことは断じて致しません」

「南川さん、あなたがそうしなかったから私がおすすめしているのですよ。過失致死だけなら大きな罪ではありません。ことに自動車事故の場合はそうでしょう。しかし、知りながら死体を放置して逃げた場合は重大です。そうならないように自首なさいと申し上げているのです」

「ではおたずねしますが、どういう理由で私が

やったと思っていられるのですか。その証拠がありますか？」

私は南川氏の顔色をうかがった。南川氏の眼はピタリと私に向けられてい、さきほどの動揺はみじんもなかった。

「昨夜の五時五十分から六時十分頃にかけて、三台の自動車が五間道路を通り、私を追い越して行きました。初めが小型の営業車、次がトラック、最後があなたのものと思われる黒い大型の自家用車で、そのほかにあの道を通った車はありません。従って三台のうち、どれかがやったに違いないのです。そこで、私はまずトラックを除外します。トラックには運転手と助手と二人乗っていたからです。どうしてかと言いますと、もしトラックが女の子をはねたとすれば、責任は運転手にかかります。運転手がごくあたりまえの人間だった場合、彼はそのまま逃げ出すでしょうか、それとも女の子を病院に運び、警察に出頭するほうを選ぶでしょうか。私はかならずあとの方法を選ぶと考えます。それが気持の動きとして自然ですから。一人で運転していたのなら逃げ出したかもしれません。しかし乗っていたのは二人で、助手は知っているわけです。運転手は、たとえ助手が秘密を守ると誓ってくれたとしても、将来ずっと助手に負い目を感じなければならないでしょう。しかも運悪く捕えられたら相当な罪に問われます。これにくらべると、多少の罰は食ったにしても素直に出頭するほうが、どれほどましであるか知れません。このトラックの運転手はそうしなかった。ということは、女の子をはねたのはトラックではなかったと解釈できるのです。その次に小型車ですが、これはごくゆっくりしたスピードで走っていました。それと反対に、黒の大型車は四十キロくらいの早さでした。事故を起して逃げる車がのろいスピードで走らせるでしょうか。もう一つの点は、急停車できなかったかということです。横合いから走り出た子供を見てブレーキをかけ、ひく寸前にとまるというのは小型にはできたはずです。今言ったようにスピードがのろかったし、軽快な車体でもあったのですから。大型はこれと反対のことが言えますね」

私はこうしておだやかに話を進めてゆくのが気に入っていた。ゆっくりとパズルを解いているのと似た面白さが私を多弁にしているようだった。南川氏は時々軽蔑を示す笑いを顔に浮べていたが、それはすぐ消え、部屋に入ってきた時の落ちつきのなさが、また彼を支配しはじめていた。

「最後に私はこう考えます。あなたの車でなく、前を走った車のうちどちらかが犯人だとすると、当然あなたはヘッドライトの中に女の子の倒れた姿を見たでしょう。その時にあなたは素通りしたでしょうか。さきほども言われたように、あなたはこの雁立市で名士でいらっしゃる。警察で証言を求められるのは当然ですから、その時に死体を素通りしたことがわかれば、あまり名誉なことではありません。そういうことをお考えになって、あなたはきっと車をとめて女の子を手に抱き上げられたに違いない。ところが、あなたは転がっている死体は見なかった。あなた自身がはねたのですから……」

南川氏は立ち上がって、応接室の中を行きつもどりつしていたが、急に私に向き直ると、蒼ざめた頬をゆがめて笑い出した。南川氏は弱みを見せまいとする最後の努力をしていたのであろう。私は彼の笑い声に、ちょっと形容できない強い印象を受けた。それは異様に感情の抜けたスタッカートだった。抑揚もニュアンスもまったく欠けていた。

「あなたのは理屈だけだ。屁理屈だ、ハハハ。そんな薄弱な根拠で、よく物ずきにやってこられたものですね。私はそんな……そんな夢みたいな言い草を聞いている暇はない。証拠はどこにあります。ハハハ、あるはずがないんだ……」

とどめを刺す時が来たと私は思った。

「最初に言えばよかったのかもしれないが、実は私はあなたの顔を見たのです。多分あなたは無意識にやったのでしょうが、私を追い越しながら、うしろを振り返ったのですよ。誰かが死体を見つけていはしまいか、自転車か自動車がつづいていはしないか……その恐れで本能的に振り返ったのでしょう。ですから、私はあなたの顔を見覚えていました。これだけ言えば、あなたのとるべき道はおわかりでしょう」

「しまった。俺は……困った困った……」

南川氏はみじめな様子になっていた。虚勢は皆取り去られて、テーブルにぐったりともたれ、焦点の定まらぬ視線をうろうろと天井に向けているのだった。

「ばかなことをした……ああ、私の名誉が……」

「南川さん、私は今お話したようなことを警察ではまだ述べていないのです。あなたを見たということもね。ですから警察はあなたを疑ってはいるが、それだけの段階にとどまっています。私はあなたが出頭しやすいように、そんな小細工をしました。犯人と断定されないうちに警察に行かれれば立場はずっとあなたに有利でしょう。警察の係官があなたを訪ねた時には不在だった。つまり、あなたはまだ嘘をついていないことになります。おわかりですか」

「よくわかりました。僕が浅はかでした。すぐにでも出頭しましょう」

「雁立署の由木警部は今夜にでもやってくるそうですから、急がれたほうがいいでしょう。不在の理由については、正直におっしゃることですね」

「感謝します。ああ、これで安心した。これまでの良心の苛責というものは実にひどいものでした……」

南川正一郎は激しいまばたきを繰り返しながら泣き笑いの表情をした。私は成功した。もちろん南川氏は車の中で一度も振り返りなどしなかったのである。

8

私は比較的に寝つきのよいほうであるが、それでもこの二三年来、ふと深夜に目ざめて明け方まで眠られないことがたびたびあるようになった。いつの間にか四十五の声を聞いてしまった肉体のせいであろう。それは何か私に強い印象を与える出来事があった場合に起るようだが、南川氏を訪れた夜もその通りで、つじつまの合わない、いろいろな悪夢ののちに私は目ざめた。目がさえてきて当分は眠れまいと思い、私のずっと解釈できないでいる問題を考えることにした。それは、極度に隠遁的な生活をしている私が、なぜあんな積極的な行動をとったか、何が私をそういうふうに駆りたてたかということである。

それには二つの解釈があった。その一つは、謎の解明そのものが私に異常な興味を呼び起したのだという解釈、もう一つは、社会的な義憤とこらしめの感情が私を動かしたのだとする解釈である。第一、純粋な興味だけからであったら、それは推理だけで終るはずであった。推理は正しくあるべきで、正しければその結論だけで満足すべきであろう。少くとも、それが私の流儀ではないか。正しくなければ——推理するに足る材料が十分でなければ、その場で放棄すべきであったろう。私はそのどちらをも採らず、実際に南川氏を訪問して私の推理を確かめる一方、南川氏に自首を勧告すらしている。

すると二番目の解釈はどうであろう。夕暮れの薄闇の中に、はかないむくろとなっている女の子の姿に私は犯人への激しい怒りを燃やし、自分の手でだけでも犯人を追求しようと決心したのだろうか。

私は女の子のかぼそい手足と、うつろに灯影を映していた瞳とを寝室の闇の中に浮べてみた。いや、それは怒りとは違ったものだった。むしろそれは深い悲しみと言ったほうがよい。涙をともなわない悲しみであり、美しいものを見た時の静かな悲哀感、無常感に似ているのだ。また私は犯人の南川氏にたいして強い憎悪を感じたわけではなく、反対に好意を感じたわけでもなかった。私はただ彼にさまざまな人間のカテゴリーの一つとしての興趣を覚えたにすぎない。

私はあらゆる過多の感情——愛情をも含めて——を圧殺しつづけてきた男である。「老い」というものがようやく私自身の中に住まい始めた今、私はその試みに成功したようである。私はただ人間関係の網目に巻きこまれることを拒み、心の平静を願っているだけである。たとえそれが灰色の平静であってもいいのだ。私は自分自身に何事も期待しないと同様、他人にも何事も期待しない。社会的に何事かをなし得る能力と熱意に欠けた私のような男は、最少限度の生活半径の中を老い朽ちてゆけばそれでいいのだ。だから私は大抵のことに心をゆさぶられることがなく、正義感、こらしめといった激情の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com